

福岡市大空襲の体験

福岡市博多区 田原 美里

呉服町から天神へ通った明治通り。その南に店屋町から上土居町、川口町、そして川端通りへ出る道があります。私の実家は、川口町（今は冷泉公園となっている）で、父がミシン店を営んでおりました。

裏は東本願寺の由緒ある妙行寺の立派な伽藍（がらん）が建ち、広い前庭は町内の子供たちの遊び場で、本道の横手から裏の方は広い広い墓地でした。

山門の正面は片土居町に面しておりました。川口町は古物商が多く、道路は木煉瓦（れんが）を敷き詰めた昔の面影を濃く残した静かな通りで、夜鳴きうどんの鈴の音が似合う町でした。

そうです。一夜にして焼けてしまった町の、平和な時代から、日中戦争、太平洋戦争への人々の暮らし、そして喜怒哀楽の情までを、踏みしめられながら感じ取っていたのはこの木煉瓦の道だったのではないのでしょうか。戦争末期には履き物も無く、はだしで登校する小学生を、どんな思いで眺めていたでしょう。

昭和20年6月19日夜、あの運命の福岡大空襲は、たちまちにして博多の町並みを焦熱地獄と化し、肉親も家も財産も、業火の中にのみ込んでしまった。

当時、既に昼夜を分かたぬ空襲警報で、川口町の家には父母のみ残り、私は幼い弟妹と、中国奥地の帰徳から引き揚げてきた姉が、生まれたばかりの長男を抱えていたので、一緒に宇美町の農家の離れを借りて、着のみ着のまま疎開していた。その日の夕方、通院していた皮膚科での受診が遅くなり、川口町へ泊まるつもりで行くと（泊まるといっても、小さな防空壕で仮眠するくらいであったが）父がいつもより厳しく、「今夜あたりが特に危険だ。汽車が無ければ歩いてでも宇美へ帰れ」と命令するので、仕方なく吉塚駅に行くと、うれしや発車の遅れていた最終便に間にあった。

ようやく宇美の家にとどり着いて、すぐ空襲が始まった。畑の中の雑木林の中から見上げると、悠々と過ぎて行く巨大な怪鳥のようなB29の姿。それも次から次と続いて、やがて博多の夜空は紅蓮の炎で彩られ、それは大きく広がって行くのが望見された。

先刻、別れた父は－、母は－、町内の人達は－、私はみんなの無事をひたすら祈った。

夜の明けぬうち、姉が作ってくれたなけなしの食糧の弁当2食分を持ち、宇美駅へ出た。うれしくも汽車は動いていたが、博多へ向かう人達の話は絶望的な話ばかりだった。「博多ン町は全滅ゲナ」「そうゲナ。人間も皆焼け死んだゲナバイ」「死体のにおいで歩かれん」

見てきたのか伝聞なのか分からないが、暗然として、座り込みたくなかった。駅を出て、ダランと焼け落ちた電車の架線が最初に眼に入った。

走って日蓮銅像の方へ行くと、よろよろと歩いて来る被災者の群。あの人この人、焼け焦げ、ボロボロの頭巾、もんぺ、煙とすすで真っ黒の顔や手足。泣くことも忘れたように、うつろな

目で母にすがっている幼い子。

ようやく一人の知人を見つけたうれしさ。駆け寄り「ご無事で……よかったですね。どんな……」と、せきこむように声をかけた。

この人は、確か十五ビル近くの食堂の奥さんだったが、

「言い難かばってん……会長さん（父のことで町内会長をしていた）、奥さん……、二人とも十五ビルの地下室で亡くならしやったと……」。

ためらいながらの言葉は鉄槌（つい）のように私を打ちのめした。絶句した私につぶやくように、

「町内の人はほとんど……。あそこが町内の待避所やったけん」。そうだ。私も幾度か待避したことがある。黙って行こうとする彼女に、私は弁当を半分渡して別れ、歩き出した。

「父母の遺体を捜さねば……」。呪文のようにつぶやきながら、照りつける太陽の暑さも、くすぶりながら、まだチロチロと小さい炎を上げている木煉瓦の暑さも感じていなかった。

呉服町から土居町へと歩きながら、見渡せば、古い土蔵とか小さい洋館が所々に焼け残り、見渡す限りの焼け野原の向こうに海が見えるのだった。

昨夜の空襲は、B29が60機で、じゅうたん爆撃したとのことは後で知った。川口町の燃え落ちた家は、まだ薄い煙を上げ、歩道の木煉瓦はぶすぶすとくすぶっている。

十五ビルの地下室はまだ傍らへも寄れず、消防団の人達が注水を始められた。翌日の午後、遺体搬出が始まり、冷泉小学校横の空き地に一体ずつ、むしろの上に置かれて行くのだった。早朝から待っていた私は、合掌しながら、一体ごとにのぞき込んだが、完全な形の遺体は少なかった。

真っ黒な炭の塊のようで、つぶれ崩れ落ちた各部、脳みそが筋子を焼いたようにポロポロと落ち、ピンクか白か判別できぬ遺体。手足の先が焼け落ちて、宙を刺すように突き出た白い骨。衣服は、遺体に焼き付いて、色や型も判別できぬ。

その日も、次の日も、私は最後の一体まで、ときには遺体にそっと手を触れて父母を捜したが、ついに捜し出す事はできなかった。

しかし、神様は見捨てたまわなかったのである。母が、あの紅蓮地獄の地下室から奇跡的に脱出して、渡辺通りの眼科で手当てを受け、3日目に知人に手を引かれ、伯母の所にたどり着いたのだ。

そして翌日から母も私と共に、父の遺体を捜しに出かけた。皆が止めるのを振り切って。

冷泉校区の遺体の中には見つからず、消防団の人に教えられ、奈良屋小学校に向いた。奈良屋小は各教室とも死体の山で、その悲惨さ。数も冷泉校区を上廻るおびただしさだった。

夏季で屍（し）臭は鼻をつき、平和時だったら私も傍らへも寄れぬくらいの遺体を一体ずつ見て回った。

すべて父ではなかった。母も放心したように外へ出ようとしていた。ふと目を、廊下の隅に押し込まれた上半身だけの遺体に向けた。父だと、焼けた顔の形で直感し、母を呼んだ。

母は焼け付いた衣服の上から肩の部分をそっとはがし、灸（きゅう）の跡で確認した。「父さんよ」と。

市の係の人たちに申告し、荷札を付けられた父の遺体は、伯父たちに抱えられトラックにほかの身元判明者の遺体と共に積まれた。

新博多駅裏の龍頭崎火葬場は閉鎖されていたが、急に再開され、父はこの火葬場で、まきで焼かれ、骨になった。骨つぼも売り切れて、どこにも無い。

あれから50年の歳月が過ぎ、戦災の悲惨さを知る人達も次々と物故者として消えて行く。

けれども愛する子供や孫たちには、決して私たちの味わった苦しみや悲しみを感じさせてはならない。私は切にそう思うのです。